

おお大勝利

平成 27 年度山東サッカー部報第 14 号 (10 月 14 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

選手権初戦 薄氷の勝利

10 月 10 日 (土) から第 94 回全国高校サッカー選手権大会の山形県予選が始まりました。山東は県総体でベスト 8 に入っているため、一回戦シードで二回戦 11 日 (日) から登場。相手は酒田南。酒田南と言え、昨年同じく Y2B に所属し、**選手の自主性を極限まで？推し進めるボトムアップ理論**の実践校であった¹。今年監督が交代し、その理論を卒業した模様。酒南サッカー部ブログにて、早くその総括が公表されることを一部県内指導者が強く望んでいる (私が筆頭)。酒南は 10 日神室産業との初戦。GK からの丁寧なビルドアップ、ボランチを経由したサイドチェンジからゴールに迫るワイドな攻撃が非常に印象深かった。ただこれは意外ではない。注 1 にもある J 先生やその恩師である A 先生の頃も、ボールを大切に扱うサッカー²を志向しており、むやみやたらに「蹴るサッカー」ではなかった。

近年「蹴るサッカー」と「つなぐサッカー」という単純な二分法の下、「つなぐサッカー」がむやみやたらに称揚され、また、「ショートパス主体のサッカー＝つなぐサッカー」と短絡されたため、**丁寧なロングパスという概念が成立しなくなり、そのようなことのできるチーム・選手への評価が低くなる**現象を招いている、という日本サッカー界の悪弊についてはこれまでたびたびこの部報内で警鐘を鳴らしてきました。それはそれとしても、山東のように「でたらめなロングキック (not ロングパス)」が多用されるチームよりは、酒南のような「つなぐサッカー」の方が魅力的ではある。

ただこれも 2 種 (高校生年代) の指導現場としては難しい議論を招く話。「つなぐサッカー」はボールロストを嫌うため、その可能性の高くなる縦パスを控え横パスやバックパスを多用することになるが、そうしたサッカースタイルがハイプレッシャー下に晒されると、よほど一人ひとりのスキルとチームとしてのパスの連携が上手じゃないと、結局バックパスした低い位置で大きく蹴り出すことになる (DF や GK に下げるがプレスに会い苦し紛れのクリアボールに頼るから)。すると、**丁寧なサッカーを志向することによって逆にサッカーが雑になる、「つなぐサッカー」を志向することによって逆に「蹴るサッカー」になる、という皮肉な事態になる**³。育成年代では、結果が出なくとも辛抱して「つなぐサッカー」を続けよう、

¹ ボトムアップ理論について興味をもたれた方は、山東サッカーOB会 HP 前年度部報第 7 号を参照して下さい。ちなみに、酒南と言え、私の代 (山東第 43 回卒) が県総体に優勝した時の決勝戦の相手が酒南でした。その時酒南は予想どおり勝ち上がったという訳ではありませんでしたが、カリスマ A 監督の下、上位進出は不思議ではなかった。近年上位進出から遠ざかっており、早くに監督の座を教え子の若手に譲った J 先生の英断が実るか、注目しております。

² ボールを失うかもしれないフィフティフィフティの攻撃を控えるサッカーで、どうしても遅攻になりがち (速攻は一か八かの攻撃になりやすくボールロストの可能性が高まる⇒ボールロストの可能性があってもゴールの可能性も高いのが速攻)。

³ この事態はフィジカル能力と守備能力が格段に向上する 2 種から特に起こると言っていていいかと思います。

というのも一つの見識ですが、2種はもう大人の仲間入りの年代ですからね。**結果を度外視して「自分たちのスタイルを貫く」⁴という理想主義は大人のサッカーじゃない**と思うし、そもそも私の好みではない。2種では、結果を問わずスタイルに固執するよりも、ピッチ内で結果が出る（相手の嫌がる）プレーを選択していくという柔軟なスタイルが望ましい⁵。それを現実主義というならば、私は明らかに現実主義者ですし、プロを目指す訳でもなく、この2種でサッカー選手としての集大成を迎える人間がほとんどの進学校、しかも、スキルフルな選手が数多くそろった訳でもない進学校では、理想主義は維持できないと考えている。要は、**常々山東のスタイルとして提唱している《下手だけど勝つサッカー》、《スキルの差をスコアの差にしない粘り強いサッカー》という現実主義に行きつくわけ**です⁶。

とまあ、2段落ほど紙幅を無駄に使用しましたが、10日の一回戦を観て、「つなぐサッカー」を志向している酒南に対して、**山東は守備から入り、前線からプレスを掛けまくり、つながせずに高い位置で奪いショートカウンターで仕留める（または、つながせずに大きく蹴らせて相手のストロングポイントに持ち込ませない）ゲームプラン**を立てる。会場は山形明正 G、そう、人工芝。昨年度は Y2B で一緒だったため、リーグ戦のかなりの試合を明正会場で行うことができた。今季山東は Y1 へ、明正は Y3 へと移りましたが、来年はまた仲良く Y2。2分の1の確率で同じブロックになる。恐らく、これまでの因縁から（決して悪い意味の因縁ではなく）、同じブロックになることでしょう。雨上がりの絶好のコンディション。いつも通り、**清野後援会名誉会長（総監督）、岸会長、後藤報道局長、そして志田トレーナー（楽トレスペース Green/せりかわ整骨院）**がお見えになる。試合後気付きましたが、**引退し学業に専念している（はずの）3年生**も応援に来てくれた。いざキックオフ。Y1 で今季試合の入りが緩く、早々に失点してしまう試合が多々あったことから、入りに集中して試合に臨む。すると、**入り最高！** 試合開始から攻め立て、相手ゴール前で左右に振って、最後は**主将のユート**が角度のないところから思い切ってシュート。相手 GK に当たりそのままゴール！！**新チームになって初の先制点**に沸く。すると、程なくして得て CK に **CB シュン** が足で合わせ息もつかせぬ追加弾となる。**山東、前半早々に 2 対 0 のアドバンテージ**を得る。「いやいや、これで楽になった」などとベンチで左うちわを振っていたわけではないのですが、ホッとしたのは否めない。一応「前からはめていく」ゲームプラン通り試合は進んでいるものの、相手 FW に仕事をさせてしまい味方陣地奥までボールを運ばれることもあり、一方的とは呼べない前半でしたが・・・前半の後半、**相手に与えた FK から直接決められ？失点**⁷。この失点、**GK 転向 3 ヶ月目の 1 年ハレル**がやはり経験不足を露呈し、やっちゃった。主審が笛で進行を止めていないのに壁作りのためゴール端に動き、戻るよう促すベンチの言葉で焦って

4 この言葉、よくブラジル W-Cup 前にどこかの国の代表についてよく聞いた言葉です。私はザックの理想主義よりも岡ちゃんの現実主義を好みます。

5 もちろん、ある状況下で、つないでじわじわ攻める（責める？）やり方を相手が嫌がるなら、それを選択しなければいけませんし、一発で DF ラインの背後が取れるならロングパスを選ぶことを躊躇してはなりません。

6 そうは言っても、現在の山東のように勝てないと、「下手だし勝てない」⇒「もっと上手くならなきゃね」となってしまう。下手でも勝ちに行く（勝つ方法を見出そうとする）ことに山東サッカー部のコンセプトの本来の意味があると思うのですが、ベースとして技術を上げるよう努力し続けるのは当然の前提です。**ちなみに、上ではこのコンセプトを私が「常々山東のスタイルとして提唱している」と書きましたが、私の独断でそう申しているのではありません。過去山東が全国大会に出場した時も、山東は県で実力 No.1 という訳ではなく、山東よりも実力の上というチームを得意の本番力で凌駕し＝下手でも勝ち、モノにしてきたのです。**

7 なぜクエスチョンマークが付いているかということ、その後の解説にあるように、GK のオウンゴールの可能性があるので。

戻った直後に打たれた何でもないボールをファンブルし、そのままゴールイン。不味いプレーが重なった上での失点でした。でも、これも経験！ 2対1で後半へ。

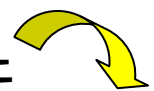
後半も試合を構築しようとする酒南に対して構築を壊そうとする山東という構図。ただ、前線からかなり「壊している」にも関わらず、その後のプレーがでたらめで、決定的シーンまで作ることができない。逆に、**何でもないパスを低い位置で相手にフリーズし、複数回決定的なシーンを作られる。後半は決定機の数では酒南の方が上。**すべて、崩されているというより、自滅。もちろん相手のプレスに動揺した側面も無きにしも非ずですが、そんなに**寄せられていない状況でのミス**が目立った。これではいつまでたってもハラハラドキドキ。**もう少し落ち着いて試合を観たい**ものですが、考えられない凡ミスが定期的に生まれ、窮地に陥るんですから、観ている方はたまったもんじゃない。攻撃においても、アウトサイドからの放り込みばかりではなくインサイドからの攻めも期待していたしハーフタイム時にそのように指示していましたが、結局不発。トラップの正確性とアイデアが足りないのは了解済みですが、視野が狭く相手をよく観ることができてないための判断ミスも多かった。視野を確保できず闇雲にバックパスに頼り相手に狙われる、というような危ないバックパスが多かったのはその証拠。結局酒南のフィニッシュ精度の低さに助けられ、そのままのスコアで後半の後半まで行くと、後半途中から出場した**「鋼の股間」2年ワタコー**がFKから豪快にヘディングシュートを決め、3対1。そして結局そのスコアで試合終了。**新チームになってから、何とこれで公式戦初勝利!!!**

勝つには勝ち、翌週まで残ることができた点では本当に良かった。正直このチームを率いていると、他のどのチームを観ても（自分たちよりも）うまく見えてしまう。酒南の一回戦を観て「やばい（明日負けちゃうな〜）」と思っておりましたが、選手はよく戦いました。守備から入るゲームプランはまずまずちゃんと実行できたかなと思います。ただ、もう少し後方での凡ミスを減らさないことには、（小学生の試合のように？）ボールが深く入るだけで常にハラハラしていかなくてはならない。攻撃面（前線）の課題は言わずもがな、満載ですね。**凡ミスはありましたが、CBで出場し途中から右SBとなった1年タイセーのそつない仕事ぶりが非常に印象的でした。3か月GKのハシルも公式戦初先発で、上述の通りやらかした場面はありましたが、今後に期待の持てるプレーも多かったです。**

次戦の相手は山形明正。人工芝ピッチと優秀な指導陣を擁し、今後の山形を背負って立つチームと密かに見ている⁸。ちなみに、その指導陣の端に山東サッカー部のOBが一人加わりました。数年前まで関東遠征にも帯同してくれていた**コータロー先生**。私が山東に赴任した時の3年生のキャプテン。かなり紆余曲折の人生を歩んでおりましたが、今年度より明正グループに拾ってもらいました。私が彼に「来週は（明正監督とご子息の山東1年生ベジータとの）**親子対決**だね」と話を向けると、コータロー先生は「（今野先生と私の）師弟対決でもありますよ」と来たもんだ。「I原先生と今野との対決という側面はあっても）お前と戦っているという意識は全くないよ」と全否定致しましたが、それはともかく、**次戦決戦**です。酒南もそうでしたが、明正も、負ければ3年生は引退かと思えます。そういう重みのある戦いです。これで誰も引退しませんかわれわれにとっても選手権は負けられない負けたくない大会です。応援よろしくをお願いします。

10月17日（土）選手権三回戦 VS 山形明正 13：30～@天童第二

10月18日（日）準々決勝 VS 日大山形と東海大山形の勝者 13：30～@県サッカー場



これに勝つと

⁸ 関係ないですが、今度は素晴らしい校舎も擁するようになりますね。

進学校大会 3度目の優勝

選手権の前の週 10月3日（土）4日（日）と第6回進学校大会（ライザカップ）が開催されました。この大会も早6回目を迎える。感慨深いものがあります。今年は坊平（たいらぐら）の天然芝ピッチが補修工事で使えないため、B大会は例年通り猿倉の天然芝で行うものの、A戦は蔵王温泉側のクレークートで行う。A戦の結果だけ簡単に記しますが、**2勝3分けの勝ち点9。平凡な勝ち点ですが、今年はこれで優勝**となりました。要するにドングリの背比べの年だったということ。選手権の前ということもあり、各チーム、故障者に無理をさせない戦いだった結果、平凡な勝ち点で優勝したとも言えます。選手権後だったら、もう少しバチバチした戦いになったのでしょうか。B戦は3年連続で米沢興譲館と合同チーム。試合前後のトレーニングでも共に汗を流し、交流を深めました。**興譲館の諸君に一言、「校歌は自信を持って歌えるようになりなさい」**。ともかく、B戦は、試合経験を積む意味でも、今後Aでの戦いを見据える意味でも、特に有意義でした。

夜は宿舍ウッディロッジのセンターハウスで合同学習会。同場所で綿密な顧問会議をしている各進学校の顧問の専門にて国数英揃っており、生徒のどんな質問にもいつでも応えられるよう体制が整っている。学習面でも最高の環境でした。

これで3度目の優勝。一回目は鶴南、二回目は山東、三回目は山南、四回目は鶴南、五回目は山東と来て、このたびの3度目の優勝。うれしいっちゃうれしいですが、今回の結果よりも**選手権前に各進学校で調整の場として活用し必勝を誓いあった**、ということの方が重要かと思います。来年こそは新しくなり素晴らしい天然芝となったたいらぐらのピッチで試合を行いたいものです。進学校の皆さま、お疲れさまでした。保護者の皆さま、遠くまで応援ありがとうございました。

選手権激励会賑やかに挙行さる

報告遅くなりましたが、9月19日（土）シルバーウィーク初日に保護者会主催の選手権激励会が行われました。例年は選手権・県新人激励会ですが、今年の看板は半分。なぜ県新人の文字が消えたかと言うと・・・などと言葉は要りませんね。時あたかもY1リーグの下位天王山の直前。選手権の話もありましたが、Y1残留に向けた決起集会のようになりました（今となってはこの記述も空しいですが）。鈴木保護者会長によるサッカー経験をふまえたアドバイス及び保護者としての応援への意気込みの挨拶と、顧問の挨拶、そして声量はないもののいつも通り熱い清野名誉会長の気合注入のお言葉の後は、「運は勇者を寵愛する」という名言を紹介しつつの渡辺副会長による乾杯。乾杯後は、保護者・顧問・スタッフ・OB入り乱れての交流。

2次会にも、保護者の皆様だけでなくOB会からも複数名参加して下さり、賑やかな一日となりました。どんな話をしたか、液体の力と月日の力もあり、もう忘れてしまいましたが、戦いの前に英気を養うことができました。保護者会の皆さま、ありがとうございました。

最後に一年生に一言。一発芸への熱意が全く欠けている。昨年的一年生（現二年生）は数々の出し物があり、素晴らしかった。来年の歓迎会にて、新入部員だけでなく、二年生（現一年生）もしっかり宴会芸を出すように。**保護者の方ばかり元気な学年になってはだめだ**。